

---

## 本の紹介

### 『自然保護の神話と現実—アフリカ熱帯降雨林からの報告』

ジョン・F・オーツ 著 浦本昌紀 訳

緑風出版 2006 年発行 309 ページ 本体 2800 円+税

小原 秀雄

JWCS 会長(会報掲載時)・女子栄養大学名誉教授

JWCS の理論研究会で読書会を行った本である。その際に概要を訳出してくれた理事の浦本昌紀氏（和光大学名誉教授）が翻訳した。このタイトルと帯にある「国際自然保護政策の実態」、またサブタイトルの「アフリカ熱帯降雨林からの報告」は、本書の真の自然保護への強いメッセージを伝え切っていない。似たようなタイトルで、実は野生生物資源の利用への支援を呼びかける本とは全く違って、著者の野生生物を救いたいとの思いが、現実の活動の中で戦い続け、しかも多くの「壁」に突き当たった事例に満ちているからである。

著者の思いは序論で概括されているが、彼が現実にも携った地域とで次のような構成になっている。第1章で西アフリカがおもな場所となっていた経過、第2章でインドとアフリカで痛切に感じた問題点、第3章では国際的自然保護運動についての要約と、その運動の変化について所感を述べている。第4章は地域社会主体の運動、第5章は森林保全の方針の問題点、第6章は人間優先の保護プロジェクト、第7章はガーナでの森林保護と利用の統一という方針の結果、第8章では動物園は箱舟たり得るか、第9章は自然への愛か金銭への愛かが問いかけている。第9章は著者オーツの野生生物及び自然保護の考え方がまとめられている。考え方はもちろん、具体的な方法についての、経緯から得た提言も行っている。

欧米の自然保護団体、とくに世界的 NGO の IUCN や WWF などに深く関わった評者は、本書の訳出を友人、浦本昌紀氏に強くすすめた。理由は二つある。評者がオーツ同様に、2000 年まで役員などを歴任し、国際団体の変貌を見て来た。WWF は日本委員会に 1970 年代から 98 年まで、IUCN は 1982 年から 2000 年まで役員として関わったからである。ワシントン条約対応のトラフィック・ジャパンも含まれよう。そこで見聞きしたことは私の語学力不足の故もあるが、なんといっても欧米主導の運動に感じた違和感が年を経るにつれて深まったことにもある。オーツのような真剣に自然保護、野生動物を守ろうとの気概に溢れる欧米の人々にも会えたが、欧米的合理主義で巧みに包み込みながら、計算をしている人が大部分であった。日本の関係者については良かれ悪しかれ、欧米に追随しながら、捕鯨問題に表れたように、日本の業界利益（経済を通しての愛国でもある）を断乎として守りぬくといった現れもあった。多くの日本の NGO が組織的には NGO だが発想は全く日本的なのを痛感してきた。

さらに評者のアフリカでの経験は、オーツと似ていたが、ごく少数の優れた人以外は、アフリ

力人なのに欧米への従属か、金銭で計算する人々だった。それでも言説では溜々たる保護論の持主なのであった。細部は別として訳者によると基本的にオーツに共感したので、まず翻訳をと思いい立ったというのである。浦本昌紀氏は、まことに綿密な調べと適切な表現を選び、訳出する。本文に則して正確である。

オーツは国際自然保護関係団体や各国の政策について鋭く批判をするが、現場での経験に則しているのも、論理的合理的である。アフリカは日本ではなじみ薄い大陸であるためもあって、容易には真実を見究め難い。その点で本書は極めて誠実な記録となっている。

この本にぜひ目を通してほしく、そのためには本書の興味深いところなどを並べねばならないだろうが、どうしても概略となってしまうのを許してほしい。本書の著者が実践対象読者としたアフリカ諸国は、シエラレオネ、ナイジェリア、ガーナといった西アフリカであり、その自然は主として森林地帯である。アフリカの自然を一括りにはできない。評者が通っているのは、東と南アフリカであって、おもに高地のサバンナである。エチオピアだけは山岳地帯といってよいだろう。つまり、広大なアフリカ大陸は多様な自然と多数の民族とが対象となる地域である。豊かな自然生態系の中で生活していく上では、人口増による圧力がない限りは、その地域内だけで生存していくことができる。そのような歴史性が多様な民族と文化を構成したのであろう。ということは、自然保護のための理解を地域住民に訴えるにしても、固有の文化を介さなければ浸透しないのである。地域住民は20世紀に入るまで様々な変化の歴史を経た。奴隷制や北からのアラブの影響、そして近代に向う際の欧米の植民地政策などである。本書を読み進むと人間をめぐっての政治的変遷などが関わる政治経済と文化などが招いた諸々の事件を、アフリカの野生動物は特に19世紀以降、人間によってどれほど収奪を受け、今も受けつつあるかなども考えさせられる。評者は1966年以来アフリカに通い、「アフリカの水を飲んだものは必ず帰る」との言い伝えの実践者でもある。そして、これらのアフリカの抱く諸問題についてはただひたすら本書を読むことをすすめる以外の適切な表現ができないのである。

なお生物地理学的には、ゾウもスイギュウも広く大陸に分布しつつ東から西へ小型化している。東にキリンで、西にオカピ（限られているが）ともいえ、霊長類は西の森林地で多様化し、カバは小型の別属別種コビトカバが西に見られる。さらに細かく見ていくなれば、アフリカ大陸はウシ科が繁栄しているものの、森林地帯では小型で単独生活を成す小型レイヨウが多様に分化し、またマングースやジャコウネコ類も多様に变化した種が棲息している。同様に森林地帯では、鳥や爬虫両生類はもちろん、昆虫などの多様さは驚くばかりだ。とくに無脊椎動物は、わずか数十年に知られていた種の何10倍にも達する千万単位の多様性が樹冠部や土壌などにも広がっている。このような世界を文字通りに手を着けることなく、守っていけるだろうか。評者はささやかな経験しかないが、IUCNやUNEPが欧米先進国の市場原理支配の中で、その相対的独立を保ちつつ、有効な保存策を実現させられるであろうか。オーツは、自らの科学者としての知的能力と保ち続けてきた良心によって、以上のように主張するこれらの諸団体が示している限界を知っている。その上で、“地域の特性を生かした自然と人間とのありかたを、現在、今後もどのようにするのか”と本書全般を通して問いかけているのである。

というのは、グローバリゼーションのもとで先進国国家と企業の戦略が進む中では、国際的自

---

然保護団体は、変質しつつも対応していかざるを得ない。建前だけは常に立派である評者はそれも意味があるとは見るから、それを現場で生かすにはどうするのかとならざるを得ないからだ。野生動物ひいては自然の運命が人間の良心的活動に一層委ねられていることを本書は語っている。JWCS の目指すところと重なる部分、そしてオーツの経験が教えてくれる部分が多い。もちろん、地域住民にとっては先進国しかも旧宗主国からの外来者であること、それをオーツ自身も知った上で努力した結果である。ぜひ一読願う。

(JWCS 会報 No. 46 2006 年 7 月より転載)